

ホラーティウスのカルミナIII₁₋₆について (1)

序 論

松 田 治

ホラーティウス (Quintus Horatius Flaccus) のカルミナ (Carmina) は全 IV 巻からなるが、その中で例外的に一群を形成する数篇がある。これが標題にした III 巻の第 1 篇に始まって第 6 篇にいたる作品群で、“Roman Odes”, “odes civiques; romaines”, “Römeroden” などと称され、このようなグループ名称で一括されて種々論議の的になっている。形式・結論のいかんを問わず多くの学者や読者がこの六編に関する研究をなし、論争を行なうことは当然のことである。この作品群にはカルミナ全集中でも理解するのに最も努力を要する部類の詩が集まっているからである。筆者はこの六編を仮に「ローマ市民歌」¹⁾ と呼ぶことにする。こういうタイトルをつけることはすでにある種の主観が入ることになりかねないが、ここではあくまでも便宜的な名称としたい。

さて、従来この作品群に関しては、基本的なアプローチの仕方がいろいろな形で示されてきた。この序論の目的は解釈の基本にかかわる若干の問題を紹介することにある。おのずと年代を追った学説史的記述に終始するが、これはやむを得ない。しかしこれを始める前にわれわれはまずいかなる点でこの六編の詩が仮にも「シリーズ」などの語で一括される可能性を持っているのか、いかなる共通因子を内容形式両面において保持していると考えさせるのかを述べる方がよいと思う。このいわゆる抒情詩集の III 巻を繙く者は一読して最初の六編には何か共通したものがあるということを理解するはずである。

まず形式的な面でいうならば、六編のうちの

1) 日本語ですでになんらかの呼称があるのかどうか筆者は知らない。

どれ一つとしてある特定の個人ないしは小数の集団にあてて作られたものがない²⁾。一編の詩を捧げられる、いわば名宛人はこのシリーズを除いた多くの作品においては、容易に見出し得るもので、たとえそれが “Maecenas”³⁾ であれ、“Crispus Sallustius”⁴⁾ であれ、あるいは “Lydia; Neobule; Asterie”⁵⁾ などのごとき女性であれ、詩中においてある人物に呼び掛けることはホラーティウスのカルミナにおいてはなじみの深い方法の一つであって、このように名指された人物にその作品が実際に献じられたものかまたは単なる埋草にすぎない場合もままたとしても、個有名の利用は時に読者の心に緊張を強い一編全体の調子の高さを示唆したり、時には打ち摧けた親近感を与えたり、その効果は種々あるといえよう。そして他の詩ではこのような形で用いられる個有人名による呼掛けが問題の六編においては皆無である。次に一貫して同一の詩律、すなわちアルカイオス格⁶⁾ が利用されていることが読者の注意を惹かずにはおかない。この詩律そのものはカルミナ全集中では最も数多く⁷⁾ 用いられていて、詩人お気に入りの型であったといえるほどであるから、たまたま詩集のこの位置でこのスタンザが見られること自体は驚くに値しないけれども、しかし同一詩律で六編が連なっていることは比較的にいえ

2) III₆では “Romane” という呼掛けがあるが、これはローマ市全体を名指してのこと。

3) I_{1, 1}, III_{8, 13}, III_{16, 20}, etc.

4) II_{2, 3}.

5) 順に I_{6, 1}; I_{15, 1}; III_{12, 6}; III_{7, 1}.

6) $\begin{array}{cccccccc} \cup & - & \cup & - & - & - & \cup & - & \cup \\ \cup & - & \cup & - & - & - & \cup & - & \cup \\ - & \cup & - & \cup & - & \cup & - & \cup & - \end{array}$ (bis) } 4行1聯

7) Carmen Saeculare を含め全104編中37編。

ば⁸⁾何か特殊なものを感じさせるし、ここでこの詩型が背負っている内容によっては壯観ともいえる。

内容に関していえば各篇ともなんらかの形で道徳的実践哲学的な問題を扱っていることは疑い得ない⁹⁾。ただ、各篇にうかがえる道徳性が「六編の詩」という数的枠を越えて継続的緊張の中にすべてを連関せしめる統一的モチーフたり得るか否かは考察を要することがらである。しかしこの道徳的な面(より具体的にいえば、詩人の警世家的な発言)は共通の要素として存在している。詩人のこのような発言は当時の時代そのものと密接な関係があるわけで、称すべきものとしてあるいは唾棄すべきものとして言及された事象を読み取るにおいてわれわれはこの詩人の姿、決して拱手傍観のみを事としたのではなかったであろう詩人の姿を見ることができる。当時の時代的メルクマールは人としてはアウグストゥス(B. C. 27年1月以後、それまではユリウス・カエサル・オクターウィアヌス)に他ならない。しかしアウグストゥスその人にしてまたこの「ローマ市民歌」の統一的モチーフであり得たのであろうか。この皇帝と晩期の詩人との親交は人の知るところである。主従両者間の理想の一致という仮定はあり得る。しかし、権力迎合的な姿勢を詩人の中に見たとしてその作品を把握する方法は比較的容易なことであるけれども、また、きわめて具体的かつ納得的であるようにも思えるけれども、このような仮定がこの六編の詩において成立し得るものであるかどうか一考を要する問題であらう¹⁰⁾。ホラーティウスが主君に媚び諂う御抱詩人としての態度で、ことさら皇帝に的を絞ってこの作品群を作成したと切り切れるかどうか。ここではともかく元老院筆頭としてのアウグストゥスの姿が各篇において見られ、あるいは暗示されるとい

う事実を述べておくにとどめよう。

各篇の成立時期については説が多いが、六編全体としてはB. C. 29~27年の間とするのが定説である(なおカルミナI-IIIの出版はB. C. 23年)。これは久しく混迷を続けていたローマの政情が漸く治まるかに見え始めていた時期であった。激動期から平和の時代への過渡期であった。いったいローマの歴史を通して真に静かな時代というものがあつただろうか。史家ではない筆者にもローマの歴史は戦争と平和とが片足ずつ踏み替えつつ世紀を経たもののごとく思える。獲得された平和は儂くいつ崩れ去るかわからぬものであつた。いずれにしろこの時期はまだ内乱の余燼が続いていた。激動期に生きる詩人が政治的な動揺を無視して自己の詩作活動を行なうことは不可能であろう。この時期のホラーティウスとても例外ではあり得ず、したがって問題の諸篇は当時の政治情勢を抜きにしては理解し難い面が多い。IV巻よりなる詩人のカルミナは種々雑多な内容をかかえており、その統一的な特質を一言二言で纏めることは所詮不可能な業である。が、ここ(III₁₋₆)では当時の政治的な諸問題が投影されていることは否定できない。だがここでまた、アウグストゥスの影についてと同様な問題があることを銘記しておかなくてはなるまい。政治上の理由で外からなる圧力が詩人に諸篇を作らしめた第一の動機であつたかどうか。要するにホラーティウスは、この時期、新政体プロパガンディストの役を務めたにすぎないのかどうか、ということである。過渡期に生まれた作品に対する現代史的投影は否定すべくもないが、われわれは、Orazio lirico と Orazio politico とを併わせ考えつつ考察を進めなくてはならない。

以上略述した共通性はすぐに認めることのできる一般的なものである¹¹⁾。このような類似性があればこそこれらの作品の成立過程、詩人の制作意図などに関してさまざまな論が提出されてきたのである。これからその基本的な論点を

8) 同一詩律による詩の連続する例は少ない。[I₁₆・17], [I₃₄・35], [II₁₃・14・15], [IV₁₄・15]はいずれもアルカイオス格。[III₂₄・25]はアスクレピアデス格の一種。

9) Richard Heinze, *Vom Geist des Römertums*, Darmstadt, 1960³, S. 190.

10) Cf. Jacques Perret, *Horace*, 1959, p. 116.

11) Heinze, *op. cit.*, S. 190. Eduard Fraenkel, *Horace*, p. 260.

見ていくことにしたい。

I

小論を進めるに当って筆者は、おおむね今世紀に入って以後の関係著作を検討するものであることをお断りしておきたい¹²⁾。前世紀のものが考慮に価しないということでは更々ない。前世紀になされた論議は大体においてハインツェの考察に纏められているからである¹³⁾。

まず、これは前世紀の学者であるが、T. E. ページ¹⁴⁾はホラーティウスとアウグストゥスの親密な関係からみて、この六編が政治的効果を狙う皇帝に示唆されてなったことはほとんど疑い得ないとしている。また、第1篇の1~4行(第1聯)は第1篇固有の序というよりは全六編の序として目論まれたらしいと見ている。政治的な見方を強く出しているが、これは当時の一般的な解釈であった(注21参照)。ヴィラモヴィツは、アルカイオスとの関連でこの“Römeroden”に軽く触れ、“Odi profanum volgus (III_{1,1})”という宗教儀式的な定り文句で始まる一連の諸篇は政治詩ではなく、また、詠物と考えるのは論外であるとしている¹⁵⁾。詳説は見られないが、前世紀から持ち越され論じられていた六編の性質をホラーティウスが当時の世情に対して持つ道徳的危機意識に発したものととらえている。これらが前もって準備された作品ではないという言葉に注意したい。11年後(1924年)にフレデリック・プレシスも軽く発言したが¹⁶⁾、しかし残念ながらこの問題性をごく簡単に片付け

てしまったと云ってよかろう。「確かにこの六編の詩は集合し忠告・教訓の類をまとめているが、同時に各篇個々の単一性も否定できない。この六編を六部分からなる一編の長詩とするか、あるいはまた、六編の間には緊密な連繋があり、昔の良き伝統を今日のローマに復活させるという単一の思想にすべて結びついているのであるとするか、それは人の勝手である。いずれにしてもこの問題はホラーティウスのテキスト史をめぐる好奇的関心の域を出るものではない」として、この二者択一的論争に学問的価値を付与することを斥けている。すでに述べたようにこの六編は諸種の要素が絡んでいて理解がはかばかしく行かない。しかし真に理解するにはそういう難しさを徐々にでもほぐして行く他ないのであり、ここでこの「あれかこれか」を考えることは大いに有意義である。プレシス自身ホラーティウスの古注家ポルフェリオ¹⁷⁾の言葉を引用していながらその問題性を無視している。ポルフェリオはIII巻注釈の冒頭で“Haec autem $\omega\langle i \rangle \delta\eta$ multiplex per varios deducta est sensus”¹⁸⁾(内容の混雑しているこの歌は色々な詩句により織りなされている)と述べて、“Haec $\omega\langle i \rangle \delta\eta$ ”で1-6全体を一つにまとめている。もしこの古注家のいうごとく全336行におよぶ詩行が一編の詩であるとすれば、これはなんと長大な一編となることか。周知のとおり詩人のカルミナにおいてこれは異常とも見なされ得る大きくなる。具体的にいうと、問題の六編中で最も多くの詩行を費しているのがIII₄(80行)であるが、これはただに六編中においてのみならずカルミナ全集中(Carmen Saeculareを含めて)においても最長の作品である。異常というのは当然首肯されるはずである。とにかくポルフェリオの言葉にすでに一つの問題提起がなされているのであり、われわれは、それをどうもよいという態度で斥けたり認めたりはできない。カルミナ研究で一度は通過しなくてはならぬい

12) ただし重要な注釈書の一つである Q. Horatius Flaccus, *Oden und Epoden*, erklärt von Adolf Kiessling, besorgt von Richard Heinze, Weidmann, 1968³ の初版は1884年 Kiessling 単独で出されたもので T. E. Page 同様例外とする。Heinze が参加するのは1898年の第3版から(以後 Kiessling-Heinze と略記)。

13) 注19) 参照。

14) T. E. Page, *Q. Horatii Flacci Carminum Libri IV, Epodan Liber*, Macmillan, 1964 (初版1883年), ad loc.

15) U. v. Wilamowitz-Moellendorff, *Sappho und Simonides*, Weidmann, 1966²(1913), S. 313, n. 1.

16) Frédéric Plessis, *Oeuvres d'Horace : Odes, Épodes et Chant séculaire*, Olms, 1966² (Hachette, 1924), p. 164.

17) Pomponius Porphyrio, 後三世紀の学者。

18) P. Porphyronis *commentum in Horatium Flaccum*, rec. Alfred Holder, Olms, 1967². なお sensus : cursus, cf. Heinze, *op. cit.*, S. 192.

わば関所のごときものであるが、なにゆえプレスがここを迂回したのか筆者にとっては疑問である。

II

プレシスの態度の不可思議さを正当に指摘したのは1929年¹⁹⁾のリヒャルト・ハインツェである。この優れたラティニストによって詩人の作品に関する多くの問題が検討されたことはいうまでもないが、いわゆる“Römeroden”は中でも強く、その意欲をそそった主題の一つであり、したがってプレシスの言葉は見過ごし難いものであった。またプレシスのみが反省の対象となったのではむろんない。前世紀から多くの研究者がそれぞれの見解を述べてきているのだけでも十分に説得的ではない²⁰⁾。

基本的な問題は、ホラーティウスがこれらの歌をそもそも統一的な意図をもってある一定期

間で纏めて制作したのであるか、あるいは、諸編はそれぞれ独立した歌であり、たまたま共通性を示していたので詩人が出版のために作品を整理するに当って、この六編が第三巻のあちらこちらに点在するのを喜ばず、かつ各編の効果を強めるために、相前後して並べたのであったのかどうか、ということである²¹⁾。この二つの仮定はハインツェがいうごとく両極端をなしており、前者の場合なんらかの理念を表現するための“Zyklus”をなすものとしての一編の詩が考えられるわけである。強固な意志のもとに短期間に纏め上げられたものとするれば、われわれは確かに“Zyklus”を、さらには“longissimum carmen”²²⁾を見ていることになる。ある外的刺激があつて、詩人が短期間で仕上げたにしろ漸次しかるべき「環」の完成めざして制作したにしろ、そこでは各編の持ち得る固有性はさほど重要な問題にはならない。第6篇を読む場合には第1篇から5篇までの連綿たる文脈を絶えず意識しなくてはならないのだろうか(もちろんそれに越したことはないが)。たとえば第2篇は必ず初篇(Odi profanum volgus)の末尾と接続して読まなくてはならないのだろうか。すなわち、

quodsi dolentem nec Phrygius lapis
nec purpurarum sidere clarior
delenit usus nec Falerna
vitis Achaemeniumque costum,
cur invidendis postibus et novo
sublime ritu moliar atrium?
cur valle permutem Sabina
divitias operosiores? (III₂, 41-48)

「で、もし苦しむ者をフリュギア生れの石も
星よりきららな深紅の織物の利用も
ファレルナの葡萄樹も、またペルシアの
香木も和らげてはくれぬのなら、
なにゆえ私は、妬をさそう扉²³⁾を用い、

19) *Zyklus der Römeroden*, Neue Jahrd. 5, 675 ff.

(後に *Vom Geist des Römertums* に収録)。

20) ハインツェが紹介する諸説をここで略記しておきたい。Peerlkampf (1834): Porphyrio や Diomedes らによって確認された解釈、すなわち III₁₋₆を一編のオードとする説を考慮し、III₁, III₂……III₆という分け方は後期の編集者たちによって勝手に切断されたものと考えて、結局、六編の詩から一編の“longissimum carmen”を組み直した。これを14部分に分け、各部はそれを自体して独立性を持つが、その全体は統一的な一編の歌になるとした。古い箴言詩においては普通の形であるという。しかしその編集方法たるや、従来の写本で信用度の高い一部を *interpolatio* であるとして排除したり、他の詩の一部を切り取って補充したりという具合できわめて自由に処理している(この方法は、今日もはや方法の名に値しないが、広く影響を与えたという)。Dillenburger (1843)「一種の市民教育の形でまずローマ的道德の習慣を肝に銘じさせ(1-3)次いでプリンキパートの重要性及びアウグストゥスの素晴らしさを説明した」。Ritter (1856)「最初の四編で四つの根本徳目を称え、5・6番目のオードで補足として祖国愛・敬神を謳った」。Kiessling (1884)「改革の重要性及びかかる改革の確かな見込を予示しつつ、アウグストゥスの新しい統治の進路を整えようと欲した」。Mommsen (1889)「アウグストゥスの新しい名前を称え、かつ、この名前に結びつく諸々の概念を総括するための一全体であり、従って、プリンキパートの出發を祝うべく、新時代向けの指導的理念を高揚するべく謳われたもの」。Domaszewski (1904)「27年の名誉楯(*clipeus virtutis*)授与を祝して歌われたものであり、碑銘に記されたアウグストゥスのいわゆる四つの徳(*virtus, iustitia, clementia, pietas*)を称えるこのシリーズはアウグストゥスの人間性との関連を見なくてはならない」。op. cit., SS. 191-93.

21) Heinze, op. cit., S. 190.

22) 注20), Peerlkampf 参照。

23) “postibus; postes” 戸口の側柱ではなく、むしろ戸または扉そのもの、豪勢な家ではブロンズや象牙で上張した(Kiessling-Heinze, ad loc.)。

新しい様式で豪勢な広間を造ろうか。

なにゆえサビーナの谷を取り替えようか、

いやまず苦勞の種となる財物などと」と、

Angustam amice pauperiem pati

robustus acri militia puer

condiscat, et Parthos ferocis

vexet eques metuendus hasta, (III_{2,1-4})

「辛い乏しい生活をむしろ進んで耐えるよう
苛烈な軍務で鍛えられた若者はよく
学ばねばならぬ、またパルチアの猛卒らを
槍恐るべき騎士として圧倒せねばならぬ」
とを緊密な必然的な連絡関係にあるものとして
解さねばならないのだろうか。たまたま例にあ
げた二編の末尾と出だしはこの連続性を肯定さ
せるものがある²⁴⁾。第1篇の33行(第9聯)以下
で貪欲の戒を具体的に述べており、それを受け
るかのように、“Angustam amice pauperiem
pati”と第2篇が続いている。前者においては
分限を越えた富の追求を戒め、後者においては
窮乏——良い面もあるものとして、amice——
に耐えることを勧めており、そこにある種の思
考連続的なものがあることは一概に否定できな
い。しかしわれわれは両者間にある調子、語調
の相違を見落としてはなるまい。「私が造る」
(moliar)、「私が取り替える」(permutem)と
いう表現にはきわめて個人的なものがあるし、
「サビーナの谷」(valles Sabina)にしても、こ
れは詩人がおそらく前31年の末頃までにマエケ
ーナスから贈られていた別荘²⁵⁾のことであり、
問題を自分自身に引き寄せて語っているのに対
し、他方第2篇の第1聯は、一般的なローマの
若者、国を守って戦うべき若い世代全体(puer;
eques)への呼掛けである。しかも後者におい
ては、「学ぶべし」(condiscat)、「圧倒すべし」
(vexet)という接続法の勧告表現によっておの
ずと厳しい響きが聞かれるのであり、さらにこ
の「戦う人」のイメージは13行目の“dulce et

decorum est propatria mori” (祖国のために死ぬ
のは快く美しい)という句に集約され、この響
きを高めているのであって、この第1聯に感じ
られる厳しさを第1篇最終聯の平調と直接つな
がるものとするには抵抗がある。たとえ第2
篇の第1聯が先行詩(III₁)の内容に引きずられ
て生じたとする仮定が成り立つとしても、それ
は決して、第2篇を独立した詩として理解す
ることを妨げることはないと思う。確かに
ハインツェは各編の個立性を考えながらも、第
2篇については、1行目に現われる“pauperiem”
と第1篇の内容との類似を重視して、少なくと
も第1篇と同列に置かるべきであるとしてい
る²⁶⁾。しかしそれはあくまでも“pauperiem”
に関する考察であると理解しなくてはなるまい。
この仮定を肯じたとして、さてわれわれは第2
篇を支配する“virtus”讚は全然理解できない
のだろうか。否、“pauperiem pati”すること
自体この“virtus”, あくまでローマ的具体的な
この精神性の一属性に他ならないのである。か
くして各編を気ままに抜粋して読んでも、その
個有性を認識し内容を理解するに何の妨げもな
いといえよう。

要するにハインツェは六編の詩を番号抜きの
一体の詩とする説を排し、「この六編は同傾向
にあるものであるが、各編はそれ自体として一
全体であり、残余の五編がなくとも理解でき
る」と主張している²⁷⁾。この二説はさきに言及し
たごとく両極ともいべき関係にあり、その中間
またはハインツェとは対蹠的な位置にあるとい
える主張がなされてきた(注20参照)。諸説が、
これらのオードを、そもそもある特定の状況の
ために、あるいは政治的ないし市民教育的構想
から、かくして短期間にほとんど同時期に作ら
れたものと見なし、そしてこの短期間制作へ詩
人を駆り立てた最大の直接的要因は27年のJ.C.
オクターウィアヌスに対するアウグストゥス
称号の授与であった²⁸⁾とし、したがってあくま

24) Kiessling-Heinze: “An die Spitze des Gedichts hat H(oraz) gerade dies vielleicht gestellt, nm an den Schluß der vorigen Ode anzuknüpfen”, および Heinze, *op. cit.*, S. 199, 203.

25) Sat, II., cf Pierre Grimal, *Horace*, 1958, p. 47

26) *Op. cit.*, S. 203.

27) *Ibid.*, S. 191.

28) *Ibid.*, S. 193.

でも政治的状況そのものが主体となつて III₁₋₆ を歌わしめたという考察を眼目にして、というのがハインツェの反省であり、これに対して、各編の独自性を尊重し、諸状況に触れつつ詩人が強制されたのではなくあくまでも自発的に歌ったのであり、したがってそもそもから一つの「環」を作ろうとの意図はなかったとの解釈を示したのである。第1篇の第1スタンザ(Odi profanum)について彼は、出版の際に詩人が全体のための序として付加したものであるとしている。そうしなければ最終聯との調和がうまく取れないからである²⁹⁾。この問題については T.E. ページと同様の考えを示している。若干私見を交えつつハインツェの主張をほぼ紹介したのであるが、各編の詳細な考察に対する検討は他に機会を求めることにして、次の言葉はその主張をよく簡潔に要約しているので最後にあげておきたい。「われわれは各編を自立的な作と考へ、詩人の折々の体験から出たものと解するよう努めるものである。こうしたほうが恐らく、詩人の中に命令された皇帝社説係 (den beauftragten Leitartikel des Princeps, 傍点筆者) を見るよりは一層よく詩人を理解するであろう」³⁰⁾。

ハインツェの論文と同時にフランスのホラーティウス学者であるヴィルヌーヴがカルミナの訳注書を出版している³¹⁾。第Ⅲ巻の Notice で “odes civiques” として問題の六編を纏めて扱っているが、確かにこの六編には “unité d'inspiration” があり、そして、ある程度までは一編から他編への脈絡もあるとしながらも、これを一編の詩 (carmen de moribus) とする昔からの説はほとんど支持できないと述べている³²⁾。神話伝説を素材として構成されている 3・4・5 の三編は、ピンダロスの性質を持っているが、ホラーティウスはこの三編を、箴言詩風な第1・2篇と第6篇の両側から囲ませたものである、として全体の構造を考えている。これは

プレスはもちろんハインツェにも見られない図式化であるが、この「枠」的な取り方は、後に別の形でフレンケル³³⁾においてふたたび現われることは興味深い。作品の性質上プレス同様に詳しい分析はないが、「一編の詩」という金縛的な旧説を捨て、六編の詩としてばらばらにしたあと、ふたたび各編の一般的傾向の類似性を利用して二つのグループにまとめ、さらに枠構成を考えるにいたったのであろう。

Ⅲ

今次大戦後の優れた研究はウィルキンソンの “Horace and his Lyric Poetry”³⁴⁾ を嚆矢とする。教えられる点の多い著作で1945年に上梓された。その中で著者は、いわゆる “Roman Odes” を “cycle” としてなされたと考える研究者たちはその理論のためにあれこれ “elaborate interpretation” を余儀なくされていたとしてこの “cycle” 説を排し、「ホラーティウスはアルカイオス詩律で書いてあった国家を問題にしている五編の great odes をここに集め、そしてこの五編の前に、同詩律によるもう一編の長い詩を置いた。そしてこの第1篇の第1スタンザは全六編の序になっている」³⁵⁾ と主張している。第2篇以下の詩はすでに作られていたのを集めたにすぎないということであるが、それでは第1篇はどうか。これは詩人が出版の際に歌ったということなのか。少なくともその第1聯は編集出版の際に付加されたものと考えているように受け取れる。六編全体の基調については特に詩人の政治的関心を論じており、III₄ (Descende caelo) において詩人はアレクサンドリアから凱旋したオクターウィアヌス (29年) に今後の平和のためには敵陣にあった者への大赦が必要であることを間接的に (カッリオペーの影に隠れて) 示唆し、III₃ (Iustum et tenacem) では、ラーオメドーンの神々に対する裏切りを原罪として亡びたトロイアに仮託されているのはごく

29) *Ibid.*, S. 199, 203.

30) *Ibid.*, S. 194.

31) F. Villeneuve, *Horace, t1, Odes et Épodes*, Les Belles Lettres, 1929.

32) *Ibid.*, p. 88.

33) Fraenkel, *op. cit.*, p. 267, 270.

34) L. P. Wilkinson, Cambridge, 1968².

35) *Ibid.*, p. 15.

最近までのローマ、奢りと内訌しかなかったデカダンなローマの姿に他ならず、外国女に現をぬかして国内争乱の因を作り危うく祖国を滅亡の淵へ追い落としかねなかった今様パリヌス³⁶⁾を倒したオクターウィアヌス（今やアウグストゥスであるが³⁷⁾に、かかる忌わしい過去——内乱と過度の奢り——に背を向けてロムルスにつぐ第2の建国者として統治するのならばローマはもはや神々の怒りを招く心配はないのである、というユーノー女神の言葉が詩人の真意として表現されている、と主張する³⁸⁾。要するにこの六編の詩は総じて新時代精神を体したものであり³⁹⁾、アウグストゥス時代において詩歌の獲得した新たな威信およびホラーティウスの公共精神と責任感を如実に表現しているのである⁴⁰⁾。そしてホラーティウスは十年間の三頭制によってもたらされた惨状に絶望して、独裁政治を、たといそれが選ぶところのない唯一の解決であったにしろ、ただひたすら歓喜してこれを迎える平和の人であった⁴¹⁾。かくしてウィルキンソンは広い意味での政治的関心、アウグストゥスへの期待、平和希求等々を諸編の基底にあるものとして考えているが、そこには詩人をプロパガンディスト、社説係とする視点はなく、むしろハインツェ同様に詩人の自主性を尊重している。なお、第1篇の第1聯が全体にかかる序部であるとしているものの、なにゆえそうであるのか述べていないが、おそらくハインツェの論に同意してのことであろう。

筆者が知る限りでハインツェについてドイツでこの問題を論じているのはクリングナーである⁴²⁾。彼は第1篇の“Odi profanum volgus et

arceo” に始まる第1聯の異常性——もちろんその類のない壮嚴のゆえに——を重視し、これが以下六編の導入部になっているとする。そしてこの六編が一度に別々のものとして公にされたかもしれないが、23年に纏めて出版する時点においては、詩人はこの一連の作品を不可分の統一体と考えていたと述べている⁴³⁾。特に各編における思考の多声的進行を強調し、各編構成の重構造性とその構成すなわち各編の独自性が認められるならばそれで十分なのであって、敢えて各編に唯一特定の“Tugend”を主題として求める必要はないとしている⁴⁴⁾。つまり唯一の構想のもとに制作されたとする“longissimum carmen”説を否定し、同時にこれとは反対に各編に述べられている諸種の徳性を根拠にして、一編の独自性を主張する説もさけている。なお第3篇と第4篇を境にして前半後半に分ける考察は Kiessling-Heinze に準じている⁴⁵⁾。

IV

1957年、ホラーティウス研究に一転機が訪れた。エドゥアルト・フレンケルの著作⁴⁶⁾がそれである。この作品の功績についてわれわれが多言を弄する必要はない。以後多くの研究者が言

36) とつ国の女 (mulier peregrina) はクレオパトラ、このヘレネーに対するパリヌスはアントーニウス。

37) III₃, 11-12: “quos (Pollux Herculesque) inter Augustus recumbens purpureo bibet ore nectar”. オクターウィアヌスが元老院から「アウグストゥス」の称号を贈られたのは27年であるからこの詩はそれ以後の作品。ここで“bibet”を“bibit”と読むのは通用しない。cf. Page, ad loc.

38) *Op. cit.*, pp. 69-75.

39) *Ibid.*, p. 81.

40) *Ibid.*, p. 105.

41) *Ibid.*, p. 76

42) Friedrich Klingner, *Die Römeroden*, Varia Variorum (Festgabe f. K. Reinhardt, 1951), Münster-Köln, 1952, SS. 118-36. *Studien zur griechischen und römischen Litteratur*, Artemis, 1964, SS. 333-52.

44) *Ibid.*, SS. 344-45. 注20)の Ritter, Domaszewski を参照。

43) *Studien*……, S. 343, 345.

45) 注12)で述べたように Heinze は Kiessling の注釈書に1898年の第3版から参加しているが筆者は Kiessling の初版を参考にする機会を得ておらず、両者間の異同について詳らかでない（参考にし得たのは 1960¹⁰⁾ および 1968¹³⁾）。Heinze が世を去った（1929）後に出た最近の両版は III₁₋₆ のイントロダクションの記述内容において異なるものはない。その内容と *Vom Geist* 所収の論文の内容とは、この六編が最初から“Zyklus”形成を目的として企てられたのではないということ、第1篇の初聯が以下六編の序になっているということなどの基本主張において変りはないが、イントロダクションに略記されているところの最初の三編と残りの三編は各三部作（トリロギ）となって平行しているという考察は上述論文中には明記されていない。Kiessling の初版によって改めて考えたい。

46) Eduard Fraenkel, *Horace*, Oxford, 1957 (Oxf. paperb., 1966).

及し、あるいは感謝しているというだけで十分であろう。

この碩学は慎しみ深い前置きを述べながらもほぼ30頁を費して“Roman Odes”の擁する問題性を正しく指摘している⁴⁷⁾。筆者はしかしその詳細な議論をここですべて検討する余裕はない。これまで問題の六編に対する諸家の基本的な視点を紹介してきたように、ここでも2, 3の問題点をあげるにとどめよう。基本的視点といったがフレンケルの場合それは明確に主張されている。すなわち六編ともアウグストゥス体制を称えるべく最初から詩人が構想を練って歌ったものとする見方である。今世紀に入ってからの関係著作の検討をわれわれはヴィラモヴィツから始め、その見解がIII₁₋₆は最初から仕組まれた作品ではないとする点にあることをすでに述べた(本文, 73頁参照)。これが約半世紀後に否定されている。また、政治詩と見るか否かについて、ホラーティウスのオード解釈の最大の障害の一つは、解釈者がすぐOrazio liricoをOrazio politico または moralista とあるいはこの両者と置き替えたがることであるとしている⁴⁸⁾。「政治的」なるものを詩人がやむに止まれぬ詩的欲求によってアウグストゥスを称えた、あくまでも自発的に政治に関連した歌を歌った態度と取るならフレンケルはOrazio politico を認めているし、また喩は適切でないが、もし大政翼賛的なもの、強制されたものと解すれば、彼はこれを否定しているのである。しかし何よりも鮮やかなのはその着想である。

その着想の斬新さはIII₂₅ (Quo me, Bacche, rapis tui) の内容をこの六編のオードと関連さ

47) *Ibid.*, pp. 259-88.

48) *Ibid.*, p. 270, n. 1. III₂ (Caelo tonantem) の Regulus の話に関連してこの詩を政治詩とする Mommsen の見解を排している(*op. cit.*, p. 273, およびn. 2). ただし III₁ (Odi profanum) に関して彼は F. Solmsen の論文 *Horace's First Roman Ode* (AJPh, 1xviii, 1947, 337 ff. 筆者未見) をそのまま認めて自説を主張しているが、その中で “the poem (III₁) that opens the cycle of *political odes* (イタリック筆者) and sets the tone for the whole group……” 云々の文章があり、上記 Mommsen の説に対する態度と比較した場合に、ここの “political” がどの程度の意味であるのかよくわからない。

せて考えたことにある⁴⁹⁾。簡単に述べると、

Quo me, Bacche, rapis tui

plenum? quae nemora aut quos agor in specus

velox mente nova? quibus

antris egregii Caesaris audiar

aeternum meditans decus

stellis inserere et consilio Iovis?

dicam insigne, recens, adhuc

indictum ore alio,…… (III_{25, 1-8})

「いずこへ、バックス様、つれ去るおつもりか、あなたに

夢中の私を。いかな森いかな岩屋へとすみやかにこぼれるのでしょうか、

心つねならぬ私は。いかな

洞窟で、すぐれたもうカエサル永遠の輝きを

星ぼしのなかへまたユーピテル様の会議の席へ加えませんか

案じつつなる私は聴いてもらえますか。

申しましようとも、常ならず、新しく、いまだ

たれにも歌われたためしのないことを」

という8行を前半とするこの詩は全20行の小品であるが、ディオニューソスに魂を奪われ己れを失った詩人の狂熱(ἐνθουσιασμός)の描写にあいまって、後半に表われる雪もまぶしいトラキアとかバックアエが狂乱の足で踏みしだくトラキアのロドペーの山などという光景によってロマンティックな印象の深い作品である。フレンケルはもちろんこの美しさを認めるのに遅れはない。だがそれを越えてあたかも詩人的な直感によってこの学者がとらえたのは、7-8行の “dicam insigne, recens, adhuc/indictum ore alio” という文章であった。「ホラーティウスが抗しようのない強い力で駆り立てられていると感じるその目標はアウグストゥスの治世を称える仕

49) これまでに挙げた著作のいずれにおいてもこの考察はなされていない。Wilkinson はカエサルの存在を強調しているものそれ以上には出ず(*op. cit.*, p. 31, 33), ただ編中のロマンティズムに熱中している(*ibid.*, p. 58).

事であり、この任務こそが詩人に不思議な力を賦与し、宗教的な熱気を吹き込んでいるのだ⁵⁰⁾。「申しませうとも、常ならず、新しい、いまだたれにも歌われたためしのないことを」という言葉は“Roman Odes”シリーズの第1聯の“carmina non prius audita Musarum sacerdos virginibus puerisque canto”（いまだ聞かれたためしのない歌のかずかずをムーサエの神宮である私が少女たち少年たちのために歌おう）につながっており、両者の密接な関係は全く明らかで、III₂₅で期待される歌がIII₁においては現に歌われているものとして描かれている⁵¹⁾。ホラーティウスが“Quome, Bacche, rapis”を、新体制を祝福するための雄大な歌を計画しつつあった時分に書いたのかあるいはすでにこのような歌を作りつつあった頃に書いたのかは問題ではなく、確実にいえることは、彼がこの熱狂的讃歌(III₂₅)の構想を抱いていたときにやはり“Roman Odes”型の詩編も心の中で形をなし始めていたということであるとしている⁵²⁾。フレンケルはかくして、すでに見たようにハインツェによって否定された六編の“cycle”としての計画性、一貫性をふたたび取り上げ、明確にこれを支持している。単に第1スタンザのみならず「ローマ市民歌」そのものについてもこれは一転機である。また以下のごとく述べて、この六編に対する自身の見解を決定している。すなわち、“Quo me, Bacche, rapis”で詩人は圧倒的な感情と最大限の誠意をもって“decus Caesaris”を不滅化させんものと彼を押し駆り立てるものについて語っているが、詩人がここで虚言を吐いているとか真剣ではないとする考えは見当外れであり、着手している仕事はもし成功すれば人生を通じて最大の勝利になるであろう。「私(フレンケル)はこれを信じる。従って私は、“Roman Odes”およびこれに類する詩が巧妙なプロパガンダの産物として、マエケーナースその他の誰かによって詩人に提案されたものとして見做さるべき

であると主張する学者たちとは袂を分たざるを得ない⁵³⁾。これはすでに述べたページの説、すなわち、アウグストゥスの要請によって六編が作られたとする説を否定するものである。

要するにIII₁₋₆のシリーズは、アウグストゥスの新世を称えるために詩人が最初から計画して歌った詩編である。しかしながらそれは自分の詩的興奮に駆られてのことであり、決して当局筋の要請によるものではなく、したがって政治宣伝の意図はなかった。フレンケルの見解を要約すればこういえるだろう。その“cycle”説の当否はさておくとしてこれはすでにハインツェ、ウィルキンソンらによって排された見方である。他方、プロパガンダ用の作品を意図してできたものではないとする点においては三者とも意を等しくしている。

その他問題になる点をあげると、まず、第1篇の第1スタンザまたは第1・2両スタンザはこの第1篇にのみ所属するものであって、決して全六編に対する序部ではないとしていることは顕著である。これは検討してきた諸説のすべてと対立する見解である⁵⁴⁾。フレンケルはF. Solmsenの意見⁵⁵⁾を取り入れてIII₁の初部と末尾との矛盾を解消しようと努力している。その矛盾というのは特に第1聯に見られる厳肅さと結びの個人的表現(本文、74-75頁参照)との違いである⁵⁶⁾。

Odi profanum volgus et arceo.

favete linguis: carmina non prius

audita Musarum sacerdos

virginibus puerisque canto. (1-4)

「私は神籟を尊ばぬ輩とは無縁でありこれを遠ざける。

53) *Ibid.*, p. 260.

54) Kissling-Heinze, III₁₋₆のイントロダクション. Heinze, *op. cit.*, S. 199, 203. Wilkinson, *op. cit.*, p.15. Klingner, *op. cit.*, S. 345.

55) *Op. cit.*, p. 262 および n. 2.

56) Kiessling-Heinze, “profanum”: hier von dem großen Haufen, der für des Dichters weihvollen Ernst nicht empfänglich ist; mit ihm will H. nichts zu schaffen haben (odi) und wehrt ihm den Zutritt. Fraenkelは“odi”についてK.-H.の解釈を最上とする(*op. cit.*, p. 263).

50) *Ibid.*, p. 259.

51) *Ibid.*

52) *Ibid.*

黙っているがよい。いまだ聞かれたためしのない

歌のかずかずをムーサエの神官として私が少女たち少年たちのために歌おう」

このスタンザと直後のスタンザ(ユピテルに関する記述)から読み取れるのは宗教的雰囲気のうちに表示されている厳粛の印象であるが、このあと第3のスタンザから読者は急に地上へ引きずり下ろされ特に最終聯に至っては詩人の日常生活的記述になり、この宗教性と日常性、緊張と弛緩の対立は従って第1聯をこのオードだけのものとするにはあまりに不自然であり、むしろ六編全体へ読者の注意を集めんがための序として付加されたのであろうという説を生む因になったのである。そしてこれは多くの支持を得てきた。フレンケルはこの III₁ 全体が国事を案ずる詩人の想念より発し、そしてその最良の道を詩人自らの歴史的考察によって得た理想的生活態度に基づかしめんとしてなされた誠に個人的な詩であると⁵⁷⁾、さらに編頭“Odi”の「私は……」という一人称(単数)表現に重点を置き、宗教的形式を装ってはいるが、この儀式を執行するのは真の司祭に非ず「ムーサエの神官」(Musarum sacerdos)であり、すなわち儀式は彼個人の「詩作」の義に他ならず、よって第1聯の表現と最終聯のいわゆる個人的表現との間にはいささかの齟齬もない、としている⁵⁸⁾。

このような推理は見事という他にない。しかし問題はないであろうか。筆者にとって III₁ の第1聯にある厳粛の印象は強いし、この聯と最終聯との間にある矛盾の印象も同様に大きい。逆に、この第1聯を六編全体の序にするために“Odi”なる一人称を用いたのであり、かくして詩人としての使命を自覚したホラーティウスがその意を明示するために、編集の際、この位置に付け加えたのものであるとも取れなくはないだろう。もう一つ、われわれは“carmen”を一編の歌とし、したがって“carmina”を数編(要するに複数)の歌と解する。もしこのプロ

ローグが第1篇についてだけのものであれば、ここで用いられた複数の“carmina”とはいったい何を指すのであろうか。おそらくスタンザ(聯)の複数を意味するものではあるまい。フレンケルがこの単純な語形変化に注意を払っているようには見えない。いずれにしても“Odi profanum……”以下の4行はローマ市民歌解釈に常に付き纏う重要な決定要素の一つであるから簡単には解答は出ない。今後の問題である。

さて、さきにヴィルヌーブの「梓」について語ったが、フレンケルの場合は III₃と III₅が梓となって“Roman Odes”の中心作たる III₄を囲むという形を取る⁵⁹⁾。III₃(Iustum et tenacem)と III₅(Caelo tonantem)との構造的類似を強調し、そのパラレリズム(一例をあげれば、前者におけるユーノー女神を利用したホメリック・トラディションに配するに後者においてはレーグルスの人物像を借りたローマ史実)は III₄(Descende caelo)をいわば浮き彫りするために最初から整えられたものであるという。こう解釈すると III₃、III₅は常に相並べて考察しなければならず、作品一個の個有性は問題にならない。III₄についても同様である。ホラーティウスははたしてさほどの綿密さをもって最初からこの市民歌群を構成したのであろうか。

最後にフレンケルの論考では III₂(Angustam amice pauperiem pati)に関して一語たりとも言及がなされていない。なるほど問題の六編中で最も短い(32行)作品であるが、しかし決して無視できない。1行目の“pauperiem”は必ず説明しなくてはならない語であるし、この語と全体を支配するごとくに見える“virtus”との関係とが明らかにされねばならない。さもなくてはこの歌の性格は定まり難いのである。筆者にとっては他の五編と等価な“Roman Odes”の構成要素であると思えるし、まして六編を一つの“cycle”と見なすにおいてはなおさらのこととも思える。

かくのごとくフレンケルの著作はわれわれを

57) *Op. cit.*, p. 262.

58) 詳しくは *op. cit.*, pp. 263-64.

59) *Op. cit.*, p. 267, 270.

裨益するところきわめて大である、が同時に問題もある。問題を含みつつもこの III₁₋₆の研究に関しては(もちろんホラーティウス研究の全てについてそうであるが)近年のいわば頂点となっている。しかしその後もこの問題に触れた著作があるのでそれを簡単に紹介してからこの序論を閉じることにする。

V

まずJ.ペレの著書⁶⁰⁾をあげたい。これまで見てきた考察でこれほど数字を巧みに利用したものはない。この意味できわめてユニークといっただろう。すなわち、第Ⅲ巻々頭の六編は密接な関係のある統一体をなしている。この巻全体がこの見事な統一体との関連で構成されていることは明らかで、それは、第1~6篇の336行、第7~19篇の336行、第20~30篇の336行という均整のとれた行数配分に現われている⁶¹⁾。“Odes Romaines”の中心的作品はⅢ₄(Descende caelo)である。80行からなるこの詩は、前半の1~36行で「ムーサエに愛される詩人」を描き、後半の45~80行で「全能の神々」を述べ、その中心にアウグストゥスが姿を見せる、という具合に整えられている。そしてこのⅢ₄全体が第2・3篇(104行)と第5・6篇(104行)とに囲まれている。第1篇はプロローグとして全体の外にあるものと考えべきで、したがって“Odes Romaines”の中心が第4篇であることは疑を入れない⁶²⁾。ペレは要するに、あるメイン・テーマを前後から取り囲んでこれを強調する、いってみれば抱擁形式を数字を駆使して指摘する。Ⅲ₄を前後から囲む枠形式に関してフレンケルはⅢ₃とⅢ₅を利用したが、拠点に相違があるのだから論の相違は当然であろう。

ユニークな方法からユニークな結論が生じるのは不思議なことではない。ペレの論点を要約

すると、「諸種の軍事政策に言及するホラーティウスは、支配層の帝国主義者・植民地主義者らの要請に応じて芸術を金で売っていたのである、という批評は当たっていない。また、なかなか動こうとせぬアウグストゥスに業を煮やした山師の好戦派が自派の代弁者として詩人をつぎ出したとする説も信じ難い。大切なことは、正義、自由、力などについて個人的見解を持っている詩人の役割を過小評価しないことである。その作品はアウグストゥス・イデオロギーの単純な反映にすぎないのか。むしろ詩人自ら、道徳的省察における自身の努力によって、このイデオロギーそのものを創りかつ導く(傍点筆者)ことに貢献しはしなかったか。ウェルギリウスについても同様であるが、皇帝は世論準備のために両詩人に国策を知らせていたのだ、という考察がしばしばなされた。だが、多くの場合アウグストゥスがこの詩人たちによって導かれるがままになっていた(傍点筆者)とする方がより真実に近い。ホラーティウスが自らを“vates”(当時はまだ“poeta”の同義語になり果せていない)と名乗るのはこういう使命の自覚によるのである」⁶³⁾。

単純な宣伝屋としての見方が打ち消されているのはもちろんだが、ここにはそれ以上の含みがある。フレンケルはこの六編を詩人の止むに止まれぬ詩的欲求に端を発したのものとして詩人を擁護したが、ペレはこれを越えて詩人がアウグストゥスの指導者であったといわんばかりの勢いである。これはしかし容易に了解できない。ホラーティウスは自分が解放奴隷の子であることを絶えず意識していた。むしろ彼自身は自由身分であるが、しかし生粋の自由身分者とは諸諸の点で思考様式を異にするのである。マエケナーヌスの知遇を得て以後は、望みさえすれば上流へ到達することは不可能ではなかったが敢えてしなかった。謙虚だったのである⁶⁴⁾。たと

60) Jacques Perret, *Horace*, Hatier 1959.

61) *Ibid.*, p. 106. III₁₋₆を一括して336行とするのは肯ずけるが、しかし残余の詩編をなにゆえ第19篇と20篇とを境にして分割するのか説明がない。数字を求めるためであろうか。

62) *Ibid.*, p. 107.

63) *Ibid.*, pp. 116-18.

64) もっともパトロンのマエケナーヌス自身も騎士身分以上の栄達を無縁とした。彼の場合アウグストゥスの片腕として正しく思うがままであったにもかかわらず。

え「精神的な意味で」と条件をつけようと、解放奴隷たちが皇帝クラウディウスを取り巻いて直接的に国政を左右したのと同様な形で、われわれの詩人が自己の使命を認識していたとは筆者には考えられない。III₁₋₆はアウグストゥスに呈された国家経営指南書とは見なし難い。やはり純粋な制作欲から生まれた詩作品(政治的要素の多少はあれ)と見たほうがより真実に近いのではないだろうか。

さて最後に、60年代に入って顕著なホラーティウス研究書はS.コマジャのものであろう⁶⁵⁾。彼はフレンケル同様に、この六編を“Roman Odes”と一括する方法を取っている。絶えず問題になるのは第1篇の第1聯であるが、彼は、“Musarum sacerdos”と詩人が自ら名乗るのは宗教的な響きを狙ったのではなく、これは、“Roman Odes”を他の作品と区別するために用いられたのであり、そしてその区別をより効果的にするため当然のこととして、第1聯という位置を得ているのであるという⁶⁶⁾。“Roman Odes”だけをまとめたの考察がないので詳しく

65) Steele Commager, *The Odes of Horace (a Critical Study)*, Yale U.P. 1966³ (1962).

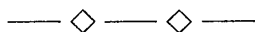
66) *Ibid.*, p. 15.

は分からないが、このスタンザの宗教性を軽く見る点ではフレンケルに近く、また、「この六編を他の作品から区別するために」という点からすると、このスタンザを全六編にかかわる序として見ているものと考えることができ、この点では両者は意見を異にする。総じて、この六編を政治的なものとする視点はIII₄、III₅に関する詳細な歴史的考察からうかがえる⁶⁷⁾。

VI

カルミナ III₁₋₆を解釈するに当たっての基本的な主張なり視点なりを不備なものではあるが学説史的に見てきた。内容の混雑した一編の詩とする古説に始まって、同じく一編の“longissimum carmen”説、各編独立説、時を経て姿を変えては現われる枠形式などを見てきた。すべて優れた研究であり、同時にすべてなんらかの問題を残していることは否めない。小序論の目的は2、3の問題点を指摘することにあつた。次は各編の解釈に立ち入りつつこれらの問題点に当たって行きたい。

67) *Ibid.*, pp. 194-226.



昭和44年度 学術研究会活動

本年度はつぎのように研究会、講演会を催した。

7月1日 於本学A301教室

教授 板倉勝高氏：東京日用消費財工業の生産体系と地域配置

教授 矢野 勇氏：地価について

11月19日 於本学B101教室

東大名誉教授 神谷慶治氏：将来社会の展望

—都市と農村との関連において—

12月9日 於本学会議室

教授 山村 喬氏： } ヨーロッパ視察旅行報告
教授 板倉勝高氏： }